主日礼拝説教「高めたり、低めたり」

日本基督教団石神井教会　2019年9月15日

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二　11章7～15節

7それとも、あなたがたを高めるため、自分を低くして神の福音を無報酬で告げ知らせたからといって、わたしは罪を犯したことになるでしょうか。8わたしは、他の諸教会からかすめ取るようにしてまでも、あなたがたに奉仕するための生活費を手に入れました。9あなたがたのもとで生活に不自由したとき、だれにも負担をかけませんでした。マケドニア州から来た兄弟たちが、わたしの必要を満たしてくれたからです。そして、わたしは何事においてもあなたがたに負担をかけないようにしてきたし、これからもそうするつもりです。10わたしの内にあるキリストの真実にかけて言います。このようにわたしが誇るのを、アカイア地方で妨げられることは決してありません。11なぜだろうか。わたしがあなたがたを愛していないからだろうか。神がご存じです。

12わたしは今していることを今後も続けるつもりです。それは、わたしたちと同様に誇れるようにと機会をねらっている者たちから、その機会を断ち切るためです。13こういう者たちは偽使徒、ずる賢い働き手であって、キリストの使徒を装っているのです。14だが、驚くには当たりません。サタンでさえ光の天使を装うのです。15だから、サタンに仕える者たちが、義に仕える者を装うことなど、大したことではありません。彼らは、自分たちの業に応じた最期を遂げるでしょう。

【福音書日課】ルカによる福音書　14章7～14節

7イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。8「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、9あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかいて末席に着くことになる。10招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。11だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」12また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。13宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。14そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

「さあ、もっと良い席へ！」

日曜日の教会の礼拝に招かれて来られた皆さんが、礼拝堂のどこの席にお座りになられるのかを、牧師が観察していると申し上げたら、気分を害される方があるでしょうか。実際には聖壇に立ったときに全体を見渡してみる程度のことですが、観察しているのは事実です。特に、空席には目を留めます。かつてそこにお座りになられていた方が思い出されるからです。

礼拝においでの皆さんは、それぞれにご自分の思いをもって、席をお選びになられていらっしゃることでしょう。決まった場所が指定席のようになられていて、たまたま他の方が先にそこにお座りになられていたりしたときに、居心地悪そうに他の席を選ばれて礼拝に臨まれるお姿を拝見することもあります。そういう席を敢えてお決めにならないようにしている方もあると思いますが、わたしは、「いつもの席」を選ばれるのも悪くはないと思うのです。いつか、地上の歩みを終えられて、天上の礼拝に移されたときには、その席を他の方にお譲りいただくことになるでしょう。ご自分にとって一番良い席を、いつか誰かに譲り渡すのです。いいえ、むしろ、そのときには、どなたかがこう言ってくださってもよいのです、「わたしは、あの人の一番良い席を、譲り受けて座ろう」と。

教会に初めておいでくださった方を、係の人が前のほうの席にご案内くださることがあります。「お客さまを、一番良い席へご案内しよう」とお考えくださってのことだと思いますが、聖壇から見ていると、そのような席に案内された方は大抵、とても困った顔をされて礼拝のときを過ごされます。礼拝が進められていくときに、周りの人の振る舞いを見ることができず、何をどのようにしたらよいのか分からないことがあるからです。他の教会から来られた場合でも、教会ごとに礼拝の進め方や作法が違いますから、分かっている人の振る舞いが頼りです。「一番前の席」が「一番良い席」とは限らないのが、教会の礼拝堂です。

福音書日課（ルカ 14 章）、安息日の食事の集まりで、招かれた客たちがどの席を選ぶかと観察していたのは、主イエスです。その主イエスが、わたしたちの礼拝堂においでになられて、わたしたちの席の選び方をご覧になられたら、どのように思われるのでしょうか。何か気づかれて、おっしゃられるのでしょうか。

主イエスが観察されていた食事の集まりでは、客たちは皆、**上席を選**んでいたといいます。彼らは、自分を招いてくれた人に近い席に座りたいと考えていたのでしょうか。それならば悪くはないようにも思います。わたしたちも、礼拝堂で神に一番近づける席を「自分にとって一番良い席」と考え、選んでいるでしょう。けれども、主イエスは、招いてくれた人が案内してくれるまで、末席で待っているようにとおっしゃるのです。招いてくれた人が、「さあ、あなたにとってもっと良い席がありますから、そこへどうぞ」と案内してくれるというのです。

神に招かれて教会に集められ、礼拝にあずかるわたしたちには、神のお決めくださる席があるのでしょう。そうだとすれば、「ここに座っていてもよいのでしょうか」と、ときどき神にお尋ねしてみるべきかもしれません。「わたしは、今、教会の中で、どこに招かれているのでしょうか」と。

お返しはできない！

ただ、主イエスは、そのように神にお尋ねするわたしたちに、むしろ重ねておっしゃられるかもしれません、「あなたがたが集まりを催すときには」と。主イエスは、安息日の食事の集まりで、招かれてきた客たちの振る舞いを見て教えられると、すぐに続いて、招いてくれた人に対しても教えられたのです。それは、その食事の集まりにいた皆に、招かれた客か、招いた側かの区別なく、お教えになられようとされたからに違いありません。実際、今回招かれた客たちは、次には自分が招く側になることがあり得たのですし、逆もあったはずです。主イエスがおっしゃられているように、今回招かれた人たちは、次にはお返しするのが当然と考えていたことでしょう。それが、古今東西、わたしたちが社会で生きていく上での常識だからです。「何かを受けたら、それに見合ったお返しをする」ものなのです。

ところが、主イエスは、そのような常識を覆すようなことを、お教えになられました。「あなたがたが食事の会を催すときは、お返しをしそうな人を**呼んではいけない。その人たちは、あなたを招いてお返しをするかもしれないから**」と。「むしろ、お返しできなさそうな人たちを招きなさい」と言うのです。「**その人たちはお返しできないから、あなたは幸いだ**」と。

わたしたちの教会では、小さな取り組みながら、ホームレス支援の活動のための品物を集めて、届けたりしています。そのような活動を教会独自で実施できるところは、日本の教会では少ないかもしれませんが、地域の教会が一緒になって、あるいは、そのような活動拠点となっている教会に資源を集めることで、多くの教会が取り組んでいることでしょう。このような取り組みは、二千年の教会の歴史の初めの時代から続けられてきたことです。特にわたしたちの教会のルーツであるメソジスト教会では、そのような活動をしないという選択肢はない、とさえ言われてきたといいます。主イエスは、確かに、そのようなことをわたしたち教会にお求めになられているところもあるでしょう。貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人、その他もろもろの、わたしたちが持てるものを分かち合うべき人たちのことを、すべて行政に任せておけばよいとは思えません。むしろ、そのような社会の制度の隙間に残された人たちにこそ、教会は目を向け、手を差し伸べるべきです。

ただ、わたしは、主イエスのこのときの教えが、そのことで留まらないと思うのです。主イエスは、その食事の集まりに現に招かれて来ていた人たちと、招いた人とを前に、言われたのです。では、この招かれていた人たちを帰すように言われているのでしょうか。そうではないでしょう。むしろ、主イエスは、こうおっしゃられたのではないでしょうか、「あなたがたが招いた人たちを、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人として招きなさい。その人たちがお返しをしないように」と。招かれた者たちにも、「あなたがたは、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人として招かれたのだ。あなたがたにはお返しができない」と。

低い者が高められる

主イエスがこのことをお教えになられたのを聞いていた人の中に、思わず「**神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう**」（15 節）と口を開いた者がいたと、続く箇所で伝えられています。主イエスの教えは、「神の国」のたとえなのです。わたしたち人間と神との関係が、本当に回復され、神の御前にすべての者が立つようにされ、共に神の創造の秩序のもとに生きるようになる「神の国」は、このようなところだと、主イエスは言われた。そう気づいた者がいたのです。そう気づくようにと、福音書記者は、その人の言葉を伝えたのです。

確かに、わたしたちは、そのような者として神に招かれているのです。わたしたちは、自分や人ばかりを見、人と比べているだけのときには、自分が貧しい者、体の不自由な者、足の不自由な者、目の見えない者であるとは、思っていないかもしれません。けれども、わたしたちは皆、神の御前に立つならば、神の御目にご覧いただくならば、皆、貧しく、自由であることができず、しっかり立つこともできない、あるいは見るべきものをしっかりと見ることのできない、そういう存在なのではないでしょうか。神の御前では、お互いを比べたところで、ドングリの背比べなのではないでしょうか。それなのに、そのことに気づこうとせずにいる。知っているはずなのに、見ようとせずにいる。それが、わたしたち多くの者の姿なのではないか。むしろ、この世の中で、自分は貧しい者、体の不自由な者、足の不自由な者、目の見えない者と自覚されている皆さんのほうが、わたしたちが神の御前でどのような存在であるのかを、よくわかっていらっしゃるのではないか。

そういう者として、わたしたちは、すべてのものを神から一方的に与えていただいたのです。お返しのできない宴会に招かれているのです。それでも、お返しのできないものをお与えいただいた者として、その一端をでも、他の人に与えるのです。そうすることで、わたしたちがすべてを神からお与えいただいているという真理を、その人にも知ってもらうためです。そのようにして、神の宴会に招かれたわたしたちが、今度は、他の人たちを神の宴会へと招く働きに用いていただくのです。

使徒書日課（Ⅱコリント 11 章）を記した使徒パウロは、このような主イエスの教えを、よく知っていたのだろうと思います。「お返しし合う関係」に留まっているコリント教会の人たちからは、一切の報酬を受け取らなかったのです。ただ、一方的に与えたのです。そうすることでしか、本当はすべてのものが神から来ること、神がお与えくださることを、示すことができないと、パウロも知っていたのに違いありません。

それは、ときにパウロのように誤解されることのある振る舞い方かもしれません。しかし、主イエスも誤解を恐れずに、ご自身をお与えくださったのです。神のお与えくださる恵みがすべてであることを、わたしたちにお示しくださるためです。そうであれば、わたしたちも、お返しされないように、与えるのです。これは、神がお与えくださる、お返ししようのない大きな恵みの一部です、と。